

大石田町ロケ映画

「コンプリシティ／優しい共犯」 いよいよ劇場公開

2017年に大石田町でロケが行われた映画「コンプリシティ／優しい共犯」がいよいよ、来年1月17日に全国で劇場公開されます。映画には最上川沿いの風景、真っ白な花が咲くそば畑、まつり、花火、黄金色の田んぼなど、夏から秋にかけての大石田の風物がふんだんに取り込まれています。



この嘘だけは 守りたかった

技能実習生として来日したものの職場から逃げ出し、他人になりすまして働きに来た中国人青年と、彼を受け入れる孤独な蕎麦職人。嘘の上に絆を強める二人を待つものとは――？

短編映画が世界の映画祭で高い評価を受けてきた近浦啓監督の長編デビュー作。中国人俳優ルー・ユーライさん、日本を代表する俳優・藤竜也さんが主演をつとめたヒューマンサスペンスです。今作品もすでに、トロント国際映画祭をはじめ各国の映画祭に出品され、高評価を得ています。

撮影は、大石田町を中心に県内各地のほか、東京や中国でも行われました。

近浦監督は、作品として価値あるものが作れたこと、その中に結果として、大石田町がPRしたいものをたくさん詰め込めたことができたことがうれしく語ります。映画の封切りは来年1月です。ぜひ劇場でご覧ください。



大画面で見た景色が たくさんある町

大石田町は非常にシネマティック、映画的で、大画面で見たと思わせる景色がたくさんある町だと思っています。この映画の前に、冬の

「なごり柿」という短い映画を撮っています。その際には雪景色の中の白い雪と朱色の柿が非常にシンボリックで、それが映画を撮るきっかけになったのですが、今回の映画で言えば最上川沿いの新緑、二面真っ白な花が咲くそば畑、黄金色に輝く秋の田んぼ……こんな景色の中で暮らせるってどういうことだろう。それから、そばがおいしくて、そこに住む人たちが強くて優しく、てしなやかでやわらかで……長編映画を撮るときも、ぜひこの町でと思っていました。

魅力的な大石田のそば文化

そばが本場において。初めて大石田のそばを食べたとき、これが本物の板そばなんだ、と感じました。元々は家庭でお母さんたちが、客をもてなすための手打ちそばという文化や、それが発展して居間上がり込むような蕎麦屋がそのまま続いている歴史も魅力的でした。



映画「なごり柿」のワンシーン

美術監督の部谷京子さんが、町に溶け込む蕎麦屋のセット「そば処ゆら」を作ってくれて、実際に撮影しているときに町の方が「今、営業してますか？」なんて入ってきたことも何度かありました。多くの町民にエキストラとして参加してもらっていますが、不思議と大石田の方はカメラの前で自然体なんです。エキストラでNGが出ることは一度もありませんでした。

今まで誰も観たことがない 花火を撮ることができた

思い入れのあるシーンをひとつだけ挙げるとすれば、花火のシーンです。川の向こうからあれだけ大きな花火が上がるといのは、僕はほかに知らないですね。それだけに、こういう絵を撮りたいというのが明確にあったのですが、年に二度の花火大会で撮りたい花火は3発か4発、賭けに近い撮影でした。あのような花火は、ほかのどんな映画でも撮けなかった花火、誰も観たことがない花火だと思います。

贅沢なことを言わせてもらえれば、大石田町の方には、劇場に2回、理想を言えば3回来て欲しいと思います。町と人がたくさん出ています。「あのおばちゃん映っている」「あ、あそこだ」みたいな感じに1回目はなかなか集中できないと思います。ぜひ、2回、3回と観て、物語に入り込んでもらいたいなと思います。

映画情報「コンプリシティ／優しい共犯」

出演：ルー・ユーライ、藤竜也、赤坂沙世、松本紀保
監督・脚本・編集：近浦啓
2018年／116分／カラー／日本＝中国／5.1ch／アメリカン・ビスタ
製作：クレイテプス Mystigri Pictures

近浦 啓 監督 インタビュー



一軒家を貸し切った「そば処ゆら」のセット。撮影には多くの町民がお客さん役で参加しました。



そば打ち指導を受ける主演の藤竜也さん。撮影の2週間前に大石田に入り、大石田そば道楽の会の阿部榮さんと小玉進さんが指導にあたり、猛特訓を重ねました。

2020年1月17日から
県内4映画館で上映!

フォーラム山形 フォーラム東根
イオンシネマ天童 鶴岡まちなかキネマ